

祇園祭の輪郭

text by Shinji Ishii
文いししんじ

四条、河原町、烏丸通の商店街に、くわらんちゃん、ひーよ、くわらんちゃん、と鉦と笛と太鼓の音が響きはじめたら、いよいよ京都は真夏。七月十七日は、山鉦巡行の日と、千年前からそう決まっている。

と、いって、祇園祭は真夏だけの行事ではない。山町・鉦町の家の奥では、年末も、正月も、春も秋も冬も、毎日なにかしら祇園祭にまつわる細かな祭事がある。たとえば、祈禱を記した紙を決められた場所に貼ったり、箱にはいった道具をずらりと並べたり。そうした箱のひとつひとつで、紐の結び方も、ひとつひとつ別に定まっている。山鉦町に住むものは、老若男女みな、そうしたすべてに習熟して、なくてはならない。

と、いって閉鎖的なことはない。山鉦の引き手の列に、力こぶをたくわえた青い目のひとの姿をちらほらみかける。宵山の夜、夕立で、こんで泡だっていたのかもしれない。

「いしくん、奥で呼んだはんで」と先輩はいった。

京町家は奥に奥に長く、中庭の横をのびる渡り廊下を通じて、奥座敷にはいっていく。この時点でもう風景がへんだった。障子をあけはなされ、黄色い灯りのこもる薄暗い奥座敷は、なにか、水族館の巨大水槽のように、暗闇に浮かびあがった。誰かに背中をおされる。うしろには誰もいないのに。

雲を踏んでいくような感覚で廊下を踏み、気がつけば奥座敷の隅に正座している。そこには、祇園祭を司る古老たちが七人ほど、大きな平机をとりかこんで、酒を酌み交わしていた。七人ほど、と書いたのは、ひととひとの輪郭が溶け合って、ひとりにも複数にもみえたからである。

女性のひとりがくったり、と首を曲げた。その瞬間しゅるしゅると腕がのび、僕にさかづきを手渡した。男性の顔が、ぐる、とうしろをむいた。手足が何本もあるようだった。そのうちの一本が徳利をとって、ぼくのさか

ずぶぬれになった観光客には、惜しげもなく手ぬぐいとほえみを手渡される。僕は学生の頃、文化人類学のゼミの一環で、菊水鉦町に手伝いではいったことがある。よその人間もうちの人間も、祭となれば、みなひとしなみに混じりあい、踊り、笑い、そうしてひとりの人間として神様に祈る。

祭は、いま生きているわたしたちのものではない。遠い昔から、はるか先まで、みんな抱えあげ、ていねいにさしわたしていくものだ。そういうわきまが、祭のしきたり以上に山鉦町のみんなのからだにはいつているから、祇園祭はたぶん、あれほどのまでのひととを毎年集める。やってきたみな、祭のもので一体になれる。祭って、こういうもんやおへんか、と、京都の町自体が、やわらかな指で指し示してくれている。

とはいえ、もともと「外国人と観光客と学づきに黄色っぽい酒をそそいだ。いただきまず、と日本語でいって一気に干す。」

七人ほどの古老たちはそれぞれ輪郭が溶けていた。伸び縮みし、腰から上が横にふわふわ流れているひとともいた。これが祭の奥か、と僕は息をのみ、酒をのんだ。たぶん、三百年か四百年、いや、時間などこえて、古老たちは祭を支え、守りつづけているのだ。

翌朝、忘れものを取りに、自転車で京町家を再訪した。ゆうべ顔面が半壊していた男性が、にこやかに、帽子と財布を手渡してくれた。この家のご主人。いまはもうふつうの人間の輪郭に戻っている。



京都府京都市

面積: 827.83km²
総人口: 1,474,735人(2016年10月1日)
人口密度: 1,780人/km²
市の木: シダレヤナギ、タカオカエデ、カツラ
市の花: ツバキ、ツツジ、サトザクラ
自治記念日: 10月15日



Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない」「遠い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。

一昨年から巡行は、先祭、後祭の二度にわかれた。本来のかたちに戻ったのだ。八坂神社から出てくる神輿の露払いを、十七日の山鉦巡行がおこなう。神輿は一週間「御旅所」に安置され、そうして二十四日の巡行のあと、夏の闇のなか、八坂神社にかえっていく。

つまり山鉦は、神輿の先触れ、露払い、マラソンでいうところの白バイ隊である。色も形も大きさもとりのりの白バイにむかって、いまの京都を生きるひととびとの声が、今年も盛大に浴びせられる。